

◇巻八・1606 額田王思_{ノしのヒテ} 近江天皇_ヲ 作歌_{ウケテ}一首

1606 君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸の簾動かし秋の風吹く

鏡王女作歌一首

1607 風をだに恋ふるは羨し風をだに来むとし待たば何か嘆かむ

【右注】

*近江天皇：天智天皇。

【語釈】

*屋戸：原文に「屋戸」とあり、「戸」は家の入口。屋戸を開けて待つ歌としては、次のような例がある。

744 夕さらば屋戸開けて我れ待たむ夢に相見に来むといふ人を

万葉時代、家屋の戸口に簾を掛けたかどうかは疑問。簾を詠んだ歌に、

2364 玉垂の小簾のすけきに入り通ひ来ねたらちねの母が問はさば風と申さむ

といった歌もあるから、風と簾の組み合わせをヒントにしただけの表現かも知れない。
*風をだに：せめて風だけでも。賀茂真淵は風を使者の意だとするが、ここは待つ人が

来る予兆である。鏡王女の歌では、その予兆すら期待できないことの嘆きを歌う。
*ともし：羨ましい。土屋・私注は、羨ましいの意ではなく、寂しい意として、風のよ
うなものを恋するのは寂しいことだと解釈する。

【総釈】

この二首の相聞歌はすでに巻四（488・489）に出ている。いまここに両方の原文を掲
げてみる。

額田王思近江天皇作歌一首

488 君待登 吾恋居者 我屋戸之 簾動之 秋風吹

鏡王女作歌一首

489 風乎太尔 恋流波乏之 風小谷 将来登時待者 何香将嘆

額田王思近江天皇作歌一首

1606 君待跡 吾恋居者 我屋戸乃 簾令動 秋之風吹

鏡王女作歌一首

1607 風乎谷 恋者乏 風乎谷 将来常思待者 何如将嘆

*ゴチックは表記が異なっている文字。

これらの二組は、歌の表記が少し違っているだけで、歌そのものと右注とは全く同じ

である。このことは、万葉集の編纂に用いられた資料に、すでに二首が一体となつてこのように書かれていたことを表わしている。万葉集では恋歌一般をも相聞に含めていたが、本来相聞は相手があつて歌い交わす形式の歌である。488 が本来の相聞であれば交わす相手は天智天皇になるわけだが、次にあるのは鏡女王の作である。二首は贈答歌とはなっていない。しかし鏡女王の歌は明らかに一首目の額田王の歌をふまえた批評的な内容になつてゐる。

ただし「近江天皇を思ひて」が鏡女王の作にもかかるのか、それとも鏡女王が待つ人は別なのかはつきりしない。二首を合わせ読む読者にとつては二人が同じ場所にて詠み合ったかのように感じられるだろう。実際はそうでないかも知れない。万葉集には後で別人が「追和」した歌の例もあるから、額田王の歌を知つた鏡女王が後に異なる場面で詠んだ歌かも知れない。しかしこのように二首並べて記載されると、それらは時間的な差が無視されて相互に同時的に関連を持った歌となる。つまりは新たな意味を生み出す二首一体の作品となるのである。

そしてこの作品には、歌の二人の作者を姉妹と考えることで、その魅力を高めた鑑賞の歴史があつた。ところが、二人の姉妹説は今日では支持されなくなつてゐる。

それでは額田王と鏡女王とはどのような関係の人物と考えられるのだろうか。以下、そのことを考えてみよう。

1 額田王と鏡女王、別人姉妹説

今日では支持されなくなつてゐるが、少し前までは額田王と鏡女王は姉妹だというのが通説だつた。これは江戸時代の本居宣長に始まる説のようである（『玉勝間』一）。

この二人の女性の名は、『日本書紀』天武紀五年に「皇女・姫王」と身分的な区別がなされてゐるように「皇女は天皇の女（内親王）、姫王はそれにつぐ二世―五世王」（日本古典文学大系頭注）である。持統紀五年ではこの区分が「内親王・女王」と記載されているが、直木孝次郎（『額田王』2007）によれば、これは持統四年の浄御原令の施行による改定だといふ。万葉集では酒人女王（穂積皇子の孫）、賀茂女王（長屋王の女）などと、令制による記載になつてゐるから、その例にならえば額田王は「額田女王」となる。

彼女の素性については、『日本書紀』の天武紀二年に、「天皇、初め鏡王の女額田姫王を娶りて、十市皇女を生せり」とあつて、父は鏡王であり、天武天皇と結婚して十市皇女を生んだことが知れる。父の鏡王については、近江国野洲郡の鏡の里に住んだことからの名であろうといふ本居宣長の説があるが、それ以上のことは分からない。

かつて尾山篤二郎は、鏡王とは、奈良県香芝町から出土した「金銅威奈大村骨蔵器」の墓誌銘に見える人物、つまり宣化天皇四世の子孫で斉明天皇の時代に紫冠だつた威奈鏡公であるとした（尾山篤二郎「額田姫王攷」『万葉集大成』九、1953）。しかし名的一致だけで、この人が額田王の父だつた確証はない。

額田王は鏡王の女であつた。それでは彼女の歌と並んでゐる歌の作者「鏡女王」とは誰か。つまり万葉集の二首目の作者「鏡女王」とは、鏡王の女なのかそれとも一人の女性の名前なのかという問題である。賀茂真淵は「鏡女王」は個人名を表わす「鏡女王」とあるべきで、額田王とは別人であると主張した（『万葉考』別記一）。本居宣長は師のこの説を承けて、鏡女王もその名前から見ると額田王と同じく鏡王の娘であり、姉にあたるだろうと考へた。

2 額田王と鏡女王同一人物説

このように真淵や宣長があえて別人説を強調したのは、それ以前に額田王と鏡女王は同一人物だという見方があったからである。元暦校本万葉集・西本願寺本万葉集その他の写本には、巻二・93の「鏡女王奉和御歌一首」の下に小字書きで「鏡女王 又曰額田姫王也」との注がある。「額田姫王」は大宝・養老令制に従えば「額田女王」となるはずだが、「姫王」の古い呼称になっているのは『日本書紀』天武紀二年の記事「(天皇初娶)鏡女王額田姫王」をそのまま採ったからであろう。契沖はこれを「後人ノ私ニ注セルナルヘシ」として無視し、賀茂真淵は「誤り也」として退けたが、額田王と鏡女王とは同一人物の異なる表記だと考えられていた証拠である。

鏡女王奉和御歌一首

鏡女王 又曰額田姫王

秋山之樹下 隱逝水乃吾許 曾益目所念後者

(元暦校本万葉集)

ちなみに契沖は『万葉代匠記』の惣釈で額田王を諸王(男性皇族)に分類しているが、巻四・488に限っては、男性の相聞歌とは思われないから「額田姫王ト云ヘル姫ノ字ノ落タルカ」と疑っている。また次の489「鏡女王作歌一首」については、これも額田姫王の作と見て「同人ノ別名又恠シムヘカラス」と述べている。つまり契沖もここでは額田姫王と鏡女王とが同一人物だという通説に立っているのである。多くの写本にある前掲の「鏡女王又曰額田姫王也」の注記は後世のものであるとしても、万葉集以前の資料に額田王の素性注記として、たとえば、488番の歌の左に「鏡女王也」などあった注記が、次歌489番の作者名に紛れたこともあり得ないことではない。

別人説は「鏡女王」を「鏡女王」という個人名だと考えるところに成り立っている。そこからさらに一步を進めた宣長は、鏡の里に住む父が「鏡王」と呼ばれたので、その父と区別するために娘は「鏡女王」と呼ばれたのであり、父を共にしていることから額田王とは姉妹であると推定した。しかし、この説は、額田王が鏡王の娘だということと、二人の唱和らしき歌(4889、再掲1606-7)が万葉集に並んでいる、ということ以外に証拠となる事実はないとも言える(沢瀉久孝『萬葉集注釈』巻二)。

姉妹か否かはとりあえず置いて、まず別人・同人どちらの説をとるべきであろうか。近年では直木孝次郎(『額田王』2007)が、万葉集の「鏡女王」は個人名ではなく「鏡王の女」と読むしかないことを理由にふたたび同人説を強調しているが、別人とする説もお消えない。

3 鏡女王と舒明皇女あるいは皇妹説

実際に、額田王と同時代に鏡女王という人物がいたことは、万葉集以外の資料から明らかである。『延喜式』「諸陵寮」に「押坂墓 鏡女王。在二大和国城上郡押坂陵城内東南。無二守戸」とあることが知られていて、舒明天皇の陵墓である押坂陵の域内に墓をもつ鏡女王がいる。(押坂は今の桜井市東方の山手。古事記では忍坂。)また『日本書紀』の同じく天武十二年には、「天皇、鏡 姫王の家に幸して、病を訊ひたまふ。庚寅に、鏡姫王薨せぬ」(亡くなった庚寅の日は翌日)と、天武天皇が危篤の鏡姫王を見舞った記事がある。江戸時代の鹿持雅澄著『萬葉集古義』は、この鏡姫王は鏡女王と同一人物だとする。この女性を押坂陵域内に葬られた鏡女王にあてることが年代的にも不自然ではない。天武紀の「鏡姫王」が諸陵式(『延喜式』「諸陵寮」)で「鏡女王」に変わっているのは、大宝・養老令制によった呼称の変化である。もし舒明天皇陵の域内に墓があ

るといふ理由から鏡女王が舒明天皇とゆかりのある人物だとするならば、彼女の病を見舞った天武も舒明を父としている点で、ふたりは血縁的なつながりの深い者たちであろう。沢瀉久孝の『萬葉集注釈』巻二では、押坂陵域内に墓があることを他の類似の例と照らし合わせて舒明の皇女か皇孫だろうと推定した中島光風の説に賛同しながら、天智天皇と歌を交わしている年齢からみて皇孫ではなく「皇女又は皇妹とみるべきではないか」と述べている。ただし、これは万葉集の鏡女王と鏡女王を同一人物と見ていることである。

4 鏡女王と額田王の叔母説

鏡女王は舒明天皇の妹すなわち天智や天武の叔母にあたるのが渡里恒信（万葉歌人鏡女王と額田王の出自）『日本歴史』200907）である。渡里恒信は、鏡女王の墓が押坂陵域内にあるという諸陵式の記事を推論の前提とし、押坂（忍阪谷）が舒明天皇の父押坂彦人大兄皇子の勢力地盤にあつて、舒明をはじめその血縁者が忍阪谷に多く葬られていると見る。そうすると鏡女王は舒明の血縁者に違いない。舒明の子である天武が病を見舞ったのも、また万葉集の巻二に天武の兄天智天皇との次のような親密な贈答歌があるのも、彼らが「きわめて近い親族」であつたことを示すという。

巻二 天皇（天智）、賜鏡女王御歌一首

91 妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらましを

「二云：妹があたり継ぎても見むに」 「一云：家居らましを」

*大島の嶺：所在未詳。ただし、中大兄皇子時代の歌でその時は難波に居たから、生駒・信貴山山系の一つだろうとする説あり。

鏡女王奉和御歌一首

92 秋山の木の下隠り行く水の我れこそ益さめ御思ひよりは

*御思ひよりは：古くから「おもほすよりは」の別訓もあり。

*行く水：秋は雨の季節だから水も増す。

この贈答は天智がまだ中大兄皇子時代のころのものである。鏡女王が亡くなった天武十二年（683）はその三十年以上も後で、そのとき天武は六十二歳であつた。この年齢から見れば、舒明の皇女ともとれるが、菅野雅雄説（『記紀歌謡と万葉の間』所収「鏡女王の出自について」）に従つて埋葬地の陵内・陵域内に区別があると考え、陵内は被葬者天皇から一親等、より広い範囲を表わす陵域内は二親等と整理すれば、鏡女王は皇女ではなく皇妹と考えるのが適当であろうと渡里恒信は推測する。さらにまた、たとえば欽明天皇の子女に、名の一部を共有する姉弟、穴穗部皇女と穴穗部皇子などがあることから、鏡女王と鏡女王とは兄妹の可能性が高い。かくして渡里恒信説では、鏡女王は額田王の叔母だという結論になる。

5 万葉集の藤原鎌足と鏡女王

以上の説は鏡女王が万葉集の鏡女王にあたるという前提に基づいている。

ところで、鏡女王を万葉集の鏡女王と同一人物と見る根拠となつてきたのは『興福寺縁起』（藤原良世編、900年成立）の記事である。『興福寺縁起』には、興福寺の前身である山階寺は藤原鎌足の病氣平癒を願つて、その嫡室（正妻）「鏡女王」が建立したものと伝える。鎌足と鏡女王との関係は、万葉集巻二（93・94）に載せる歌に、鎌足が「鏡

王女」に求婚したときの歌とその返歌があることと符合し、前掲『萬葉集古義』でもこの縁起の記事によって鏡女王は「これ鎌足大臣の妻なりし證なり」（二巻之下）とする。しかし万葉集の鏡女王が鏡女王であると決めるには、『興福寺縁起』の記事が信用できるもので、その記事が逆に万葉集の歌によってねつ造されたものではないという前提が必要である。興福寺関係資料では、この記事が、『興福寺流記』に引用される天平宝字年間の資料と考えられる「宝字記」にも見られるという（直木孝次郎『額田王』2007）。しかし直木孝次郎はこれを天平宝字年間におけるねつ造と見る。天平宝字年間は西暦の757～765年にあたる。鎌足没後約九十年、鏡女王没後約八十年という時間は、古代人にとって伝承の記憶が失せるほど長いものではなかったとの見方も可能であろうが、しかしそれは、鏡女王が鎌足の嫡室だとする資料が鎌足の身内の藤原氏の資料以外にないことから何とも言えない。

万葉集における藤原鎌足と鏡女王との贈答歌は次の通りである。

巻二

内大臣藤原卿、娉鏡女王二時、鏡女王贈内大臣二歌一首

93 玉櫛笥覆ふを安み明けていなば君が名はあれど吾が名し惜しも

*玉櫛笥：玉はほめたたえた美称。櫛箱は大切なものとされた。その蓋をかぶせるのは簡単だと続く。また、「明け」も蓋の縁語になっている。「覆ふを安み」は、二人の仲を秘密にするのは簡単だ、の意である。でも世間に知られたら、の意が「明け」にある。

*あれど：それはともかく。

*吾が名し惜しも：世間に立つ悪い評判による不名誉。

内大臣藤原卿、報贈鏡女王二歌一首

94 玉櫛笥みむまど山のさな葛さ寝ずはつひに有りかつましじ

〔或本歌曰、玉くしげ三室戸山の〕

*みむまど山：原文に「将見圓(円)山」とある。別訓に、江戸時代の学者の説として（『万葉童蒙抄』『万葉考』）ミムロノ山。異伝に「三室戸山」とあり、もし「ミムロノ山」ならば、一般的には大和の三輪山をさすが、「戸(と)」の字が気になる。ミ(見)は身(み)とは甲乙の仮名違いではあるが、櫛笥の蓋に対する身(中身)の意で続く。

*さな葛：蔓性の植物。サネカヅラ。次の「さ寝」を呼び出すことは。

*有りかつましじ：有ることができないだろう。共寝しないでいることはできないだろうさ、の意。

6 別人説、皇妹説、叔母説に対する直木孝次郎の批判

興福寺の縁起における鏡女王鎌足嫡妻説は奈良時代後期につくられた虚構だという立場に立つのが直木孝次郎である。直木氏は、渡里恒信「万葉歌人鏡女王と額田王の出自」に説く別人説に対して次の批判をしている。

1. 鏡女王が、舒明天皇の皇妹として押坂陵域内に葬られているとするならば、藤原鎌足の正妻と考えることにはいっそうの無理がある。なぜなら「鏡女王が仏教を信じ、かつ鎌足の正室であるならば、鎌足と関係のない忍坂の地に、非仏教の形式で葬られるというのは、大きな矛盾」になるからである。正室であるならば、鎌足ゆかりの山科や摂津の三嶋にあるのが自然である。

2. 四世王以上の皇族女性と臣下との結婚に関する制約は、大宝令に成文化される令制以前の天智・天武朝にはずつと厳しかったから、鎌足と鏡女王との結婚は考えられない。その制約が次第に緩んだ時代になって、『興福寺縁起』のような伝承が生まれたのである。たしかに鎌足は天皇の私物的存在である采女を妻に得てもいる。しかし、采女と皇女とは次元を異にする。
3. 「女王」と「王女」とが混用された例は、七、八世紀の古典には見えないから、「鏡女王」と「鏡女王」を同一には考えられない。
4. 舒明天皇の兄弟ならば鏡王も鏡皇子と称すべきである。日本書紀ではその弟である茅渟皇子を茅渟王と書いた例があるが、しかしこの一例をもって「皇子」と「王」、「皇女」と「姫王」の混用があつたとは考えにくい。茅渟王は例外的な書き方で混用ではないからである。「皇女・姫王」の区別も厳密なもので、舒明の皇妹ならば鏡姫王ではなく、鏡皇女といったはずだとする。

7 鏡女王は鏡王女ではない

以上の4点のうち、愚見では1.と2.は必ずしも納得のゆく批判とは感じられない。1.については、天武が危篤の鏡姫王(鏡女王)を見舞つたのは、彼女が皇妹であるからと限定する必要はない。もつと血縁の遠い女性であることを否定しないのではないか。また、鎌足はすでに十四年前に亡くなっている。そして仏教の葬送儀礼もそれほど深く浸透していなかったと思われる時代に、天武が彼女を鎌足と関係のない父祖ゆかりの地(忍坂)に非仏教的な形式で埋葬させたという考えも成り立つ。また、2.についても、天智が中大兄皇子時代に大化改新をともに行なつた鎌足との深い関係を考えれば、鎌足への降嫁は、それこそ次元を異にする例外と考えることもできるだろう。皇妹でないとするれば、ここでは4.は問題外である。しかしこうは言つても、鏡女王が鎌足の正妻であることを肯定するものではない。また、たとい鏡女王が鎌足の正妻であつたとしても、万葉集で鎌足が求婚し歌を贈答した鏡王女は、3.のとおり別人である。

なお、万葉集の鏡王女が別人であるという理由は、鎌足に求婚されたときの万葉集の歌、「玉櫛笥覆ふを安み明けていなば君が名はあれど吾が名し惜しも」(93)が、求婚拒否の内容になつていないからではない。万葉集で天智天皇や藤原鎌足と社交の恋歌を交わしたのは鏡女王ではなく鏡王女(鏡王の娘)であつた。「藤原卿の鏡王女を娉し時」とあるのは、歌から解釈した注記であらう。

8 鏡王女と額田王姉妹説は成り立たないか？

それでは万葉集の鏡王女は額田王をさすのであろうか。しかし額田王が鏡王の一人娘とは限らない。姉妹がいたことも考えられよう。しかしまた姉妹がいたとしたら、額田王には名があるのに、姉妹の名が記されていないのはなぜか。これについて賀茂真淵は、鏡王の娘たちの中で額田王だけ名が知られていて他は知られていなかったからだという。また逆にも二首目も額田王の作であるならば、その名を避けてただ「鏡王女」と書くことはありえないともいった。二首同じ作者であるならば万葉集では始めに「額田王思近江天皇作歌二首」と書くのが通例である。真淵の『万葉考』別記二には次のようにいう。

「かく並^ト挙るに、同人の名をことに書事やはある、左にも右にも別人なる證也、…すべて集中に生羽が女・播麻の娘子など有は、名のしられざる也、既名の頭なる額田姫王を、又は某女と書へからず…」(『万葉考』別記二)

きわめてもつともな話ではなかるうか。もし「鏡王女」とある万葉集中の人物がすべて額田王であるならば、「額田王」と書かずになぜ四度も「鏡王女」とだけ繰り返す書かれているのか。——ということになればまた自ずと本居宣長の姉妹説にもどることになるだろう。

額田王の歌を鑑賞するうえで作者の関係が直接問題になるのは「君待つ」と「風をだに」（488-9、再掲1606-7）の歌だけである。「君待つ」と「風をだに」が天智天皇を対象とすることは右注に明らかである。次の、姉か妹の恋歌「風をだに」が、待つ甲斐のない寂しさを詠んだ歌であることから、藤原鎌足を対象としたものだという考えは、上記のとおりほぼ成り立たない。だとすれば、待つ対象は同じく天智である。二人はともに近江朝の宮廷に仕えた女性たちであるから、天智の寵愛を得ている額田王の歌に対して、姉か妹の歌は愛情の冷めた歌か、あるいは額田王と比べたときの関係の薄さを風に託して嘆いた歌（あるいは、すねてみせた歌）と読むことができよう。

◇◇漢詩文との関係

巻八で、二人の相聞が秋の歌に分類されているのは「風」が詠まれているからで、風はすでに季節の風物として扱われている。これは漢武帝の「秋風辞」が有名であるように漢詩の影響によるものである。また、契沖が「今按、此歌ハ額田王ノ大カタノ相聞ノ歌トハ見エズ」（代匠記）と疑問を投げかけてもいるように、通ってくる夫を室内で待つ女性の姿には飛鳥時代のイメージというよりは王朝のみやびを感じさせる。そのためこの歌は、額田王に仮託した「奈良朝びとの虚構であったのではないか」（伊藤・积注）とも、「中国六朝流行の情詩を模した虚構歌の可能性もある」（中西進『万葉集』講談社文庫）とも言われる。とくに鏡王女の歌は夫に忘れ去られた妻の嘆きの歌であり、中国の〈閨怨詩〉にあたる。

たとえば額田王の歌の、簾を動かす風の表現にも漢詩の例が指摘されている。『玉台新詠』巻十「近代呉歌」の「秋風」と題された次の詩、

秋歌

秋風入二窗裏しゅうふう いる そうつりニ

秋風が窓のうちに吹き込む。

* 窗 || 窓

羅帳起飄颻らちやう おこりてひょうようす

うすぎぬの垂れ幕が、風にあおられてひるがえる。

仰レ頭看二明月あおがしめて こつげをみ げつを

私は頭をふりあげて明月に見入り、

寄レ情 千里光よす じやうをせん りのひかりに

千里かなたを照らす月の光に情を寄せる。

（新釈漢文体系『玉台新詠』より）

は、秋風が羅帳を揺らす室内で物思う女性の情景を歌う。また『楽府詩集』に載る五六世紀頃の呉の地方の民歌「崑山畿」の中にも、次の一首があることが知られている。

夜相想よる あい おもつ

夜、あなたのことを想っていると

風吹窗簾動かぜ ふいてそう れん うごく

風が吹いてきて窓の簾を動かした

言是所歛来いう、これしよ かのきたれるかと

はっとして、嬉しい人が来たのかと思った。

（松枝茂夫編『中国名詩選』岩波文庫より）

* 崑山畿は、蘇州に近い地名という。また、これを含む呉の地方の民歌は、みな恋歌

を内容としていて、実際に歌われた歌謡。全二十五首からなる「華山畿」は、「ある
人士と宿屋の少女との悲恋の物語によると伝える」（松枝茂夫注）。

近江朝の時代は漢文学が盛んなときであったことを考えると、額田王や鏡王女自身も間接的にこれらの恋歌を耳にしたことがあったと思われる。女性たちは耳学問で漢詩の発想を充分学び得たであろうから、それをヒントに漢詩の世界を和歌で表現したとも考えられるだろう。額田王にはすでにみやびな遊びの春秋競憐歌（16番）もあるのだから。

前掲の漢詩はともに呉の国の歌である。前者が空閨を守る女性の悲しみを表現する情景描写であるのに対して、後者は予兆としての風を歌う。額田王の歌は、それ一首だけでは、風を予兆として詠んだものかどうか決めかねるのだが、次の鏡王女の歌と切り離せない二首一体の「作品」であったことを考えれば、自ずから予兆となる。なぜなら鏡王女の、

風をだに恋ふるは羨し風をだに來むとし待たば何か嘆かむ

の歌では、額田王の風が肯定的な対象、羨やむべきものとなっているからである。ただし、予兆と読みつつも結果的に風しか訪れない失望が次に来るという解釈もあるが、鏡王女の歌の嘆きを印象づけるためには来訪の予兆に胸を躍らせて待ち続ける明るさのままにしておいた方がよいだろう。

これらの歌は宮廷の雅宴で作られ披露された歌であった可能性もある。あるいは鏡王女の歌は後日追和した歌かも知れない。しかし二首は万葉集収録以前から一体の歌であった。額田王はもともと前述のような意味では詠まなかったのかも知れない。しかし後に鏡王女の歌が加わることで、いわば新たな文脈が生まれ、先にあった歌が後の歌によって意味の限定を受けるのである。

◇◇七夕歌との関係

額田王が天智天皇を恋う実際の心情を詠んだ歌ではないとすれば、それはどのような場面で詠まれた歌なのだろうか。まず、歌が詠まれた場は近江朝宮廷の雅宴であったと考えてみよう。既述のようにこの時代は漢詩文の盛んな時代だった。万葉集には額田王の歌に近い表現を持つ次のような歌がある。

1523 秋風の吹きにし日よりいつしかと我が待ち恋ひし君ぞ来ませる

これは卷八の秋雑歌に分類されている織姫の立場で詠んだ七夕歌で、大伴旅人宅における天平二年の作であるから時代はかなり下るが、秋風に期待を寄せて君を待つ女性の歌という点で、額田王の歌と同想と見ることができよう。七夕は漢詩文のテーマとして近江朝でも詠まれたと思われるから、宮廷の雅宴で七夕を詠んだ和歌があっても当然である。少なくとも人を恋うる歌に秋風を詠むという表現は七夕伝説に学んだと考えるのが自然であろう。